

団体会員
一般会員
賛助会員
協賛企業

各位

令和4年12月7日
一般財団法人 全国豆腐連合会

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

○北米産大豆

11月のシカゴ相場(2023年1月限)は、\$14.2/bus頃から始まり、その後多少の値動きがありました。最終的には月初よりも高騰し、\$14.5/busの引けという月となりました。

米国農務省が11月9日に発表した、2022/2023年度の米国大豆需給報告において、単収がエーカーあたり50.2bus(前月49.8bus)、生産量が1億1,828万トン(前月1億1,738万トン)にそれぞれ上方修正され、全体供給数量は1億2,612万トン(前月1億2,525万トン)に上方修正されました。需要面では、搾油用等の上方修正がありました。最終的には期末在庫は599万トン(前月544万トン)に上方修正され、在庫率4.98%(前月4.54%)も上方修正という結果となりました。また、2022/2023年度の世界大豆需給報告ですが、2021/2022年度の輸入量が上方修正されたことにより、2022/2023年度の期初在庫が上方修正され、期末在庫は1億217万トン(前月1億52万トン)、在庫率も26.9%(前月26.4%)に上方修正されました。

米国产大豆に関してですが、既に収穫が完了しております。完了直前の収穫進捗率は11月7日時点で94%と過去5年平均の86%を上回っており、順調に収穫が完了したものとされます。また、先述の通り、米国大豆需給報告に関して、前月と比べ単収及び生産量が上方修正されたことも踏まえて、概ね作柄は良好であることが伺えます。南米(ブラジル・アルゼンチン)では作付が進んでおります。直近のブラジル大豆作付は87%完了(5年平均:85%)、全体の10%が開花期に到達しており、現段階では順調な生育状況です。一方のアルゼンチンでは、ラニーニャ現象による乾燥が原因で、過去22年間で最も遅い作付け開始となっており、現在の作付進捗率は29%(5年平均:50%)となっており、大豆の作付面積の一部を作付け放棄する農家が出現する可能性が高まっております。南米の作付進捗状況以外で相場に影響を与える要因として、中国を中心とした世界需要、ロシア・ウクラ

イナの国際情勢等、変動要因が多い状況であるため、引き続き注視が必要です。

2021年産大豆の入港状況は、依然として大幅な遅れや船積みキャンセルが発生しており、混乱が続いている状況です。今後も国内在庫ひっ迫が懸念されます。また、海上運賃は高値水準を維持しており、引き続きコストアップの要因となっております。

○為替相場

11月の円相場は、1ドル148円後半から始まりました。最終的には、1ドル=138円後半で引けという月になりました。

米国の10月消費者物価指数が市場予想を下回る結果となり、インフレ緩和を意識した米長期金利の低下、米中間選挙後のねじれ発生懸念、日本銀行の黒田総裁による円安牽制発言、フィラデルフィア、ダラス連銀総裁による「利上げペース緩和を予想、翌年のどこかの時点で政策停止を予想する」等、相次いで米国当局者からの発言が見られたこと、更に11月11日、ミシガン大学の消費者信頼感指数速報値が市場予想を下回ったことで、米国FRB(連邦準備制度)が次回12月FOMC(連邦公開市場委員会)での利上げ幅を0.5%にとどめる可能性が強まった事を背景にドル売りが強まりました。最終的には1ドル138円後半の引けという月になりました。

為替の動きは非常に激しく、予想が難しい状況です。米国の景気動向指数、長期金利の動向により、為替は大きく変動し易い状況であるため、引き続き注視が必要です。

○国産大豆

令和3年産の入札会は7月で終了しております。令和3年産は約40,259トンが上場され、落札率は81.6%、平均落札価格は、普通大豆¥9,864/60kg、特定加工用¥9,152/60kg、全体¥9,709/60kgとなっており、令和4年産の入札会までは、この結果が相場の指標となるものと思われれます。

令和4年産国産大豆に関してですが、2022年11月末頃に農林水産省ホームページにて令和4年産大豆の集荷計画数量の最新版が発表されました。

<令和4年産大豆 集荷計画数量>

地区	3年産 集荷実績 ①	4年産 生産計画 ②	4年産 集荷計画 ③	3年産 実績対比 ④=③/①	4年産生産 計画対比⑤ =③/②
北海道	70,125	69,000	70,600	101%	102%
東日本	63,677	62,500	53,500	84%	86%
西日本	30,194	32,900	31,200	103%	95%
九州	17,517	33,900	29,500	168%	87%
合計	181,512	198,300	184,800	102%	93%

前述の通り、全国合計では令和4年産の生産計画に対して、93%の予想と計画未達成の見通しですが、昨年(令和3年)産比較で102%となっております。

作柄状況を地区別にみると、北海道においては、播種後から7月までの曇天・低温、登熟期後半から収穫期にかけての高温・乾燥で、一部の地域にやや小粒化傾向がみられるものの、集荷数量は生産計画を上回る予想。東日本地区においては、東北および北陸の特定エリアで、夏場の豪雨やその後の断続的な雨天等で生育前半に障害を受けたため、集荷数量は生産計画を下回る予想。西日本地区においては、東海の一部地域にて播種後の大雨によりまき直しが発生したことや、北陸や中国地区の一部にて夏場以降の断続的な降雨や台風の影響から小粒化傾向が見られることから、集荷数量は生産計画を下回る予想。九州地区においては、9月の台風による被害と子実肥大期の乾燥により小粒化傾向が見られ、集荷数量は生産計画をやや下回ると見込まれる予想となっており、全国的に天候の影響により小粒化傾向である事が、計画未達成の原因と思われれます。

令和4年産国産大豆の初回の入札会は2022年12月14日(水)に行われることが発表されました。上場予定数量は、北海道・東北地区を中心に約1,800トンを予定されております。初回の結果が国産大豆全体の相場になるということではありませんが、強気な結果となるのか、弱気な結果となるのか、注視が必要です。

以上